
シモーヌ・ヴェイユにおける

“人間の条件、

村 島 美 恵 子

1930年代を誠実に生きたシモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil）は1909年2月3日パリに生れた、父は優秀な、患者に親切な外科医で、母は寛大な優しい人柄であった。

ヴェイユと云う名はアルザス・ロレース地方に多いイスラエル系の家系である、家族は宗教的には無関心な態度を示しており、シモーヌも学生時代まではキリスト教に余り関心を持っていなかったように思われる。

彼女には3才年上のアンドレと云う兄がいた。子供時代のシモーヌは心の優しい利口な少し頑固な性格を持っていた。

彼女の性格を物語るエピソードとして、両親や兄に連れられて冬の日ピクニックに出かけた時の事、両親は彼女の兄アンドレに可成り重いリュックを背負わせていた、シモーヌには何も持たせていなかったのも、それが不満なのか、兄のリュック姿を可哀想に思ったのか、荷物を持たせてくれないならば歩かないと言って雪の上に坐りこんで動かうとしなかった。又冷たい水で顔を洗う経験として真冬、氷水で顔を洗ってみたりしている。シモーヌが5才の頃は第1次大戦中で戦地にいる兵士達の苦勞を思っテチョコレートや甘い菓子を食べようとしなかったとも云われている。子供の頃の性格は長じてもいろいろの形で織り糸のように織りなされていくものであると云う事は彼女の生涯を通してその事がうかがわれる。

小学校時代は身体が虚弱な体質であったため、のんびりと過している、シモーヌの兄アンドレは若き日のパスカルを偲ばせる程の数学の天才で有

名な数学者として現在も活躍している。

1925年バカロレア（大学入学資格試験）を終えてエコール・ノルマルに入学の準備としてリセ・アンリに手続きを終え、シモーヌはここで哲学者アランの指導をうける事になった。当時の彼女の服装はみすぼらしく、態度にも粗野な所があり、自分で巻いたシガレットを絶えず口にしていたと云われ、タバコのかすが口のはしや洋服のあちこちについていたとも云われる、彼女の友人達は「シモーヌは女の子らしくない」とか「彼女には我慢ならない」と言っていたようである。15才の頃の彼女の写真をみると中々の美少女であるが、彼女はむしろその美しさを隠す為めわざと無造作な服装や態度をとっていたようにも思われる、この頃からすでに彼女は内部に沈潜してゆく思想の方に重要性を見出し始めているのであろう。

哲学者アランが彼女に与えた影響は事柄の本質をそれ自体から見つけ出すとする注意力・又思考の独自の方法等であろう。その影響が歴史の時間は良く欠席していたようである。師のアランもシモーヌの政治・社会問題についての考えを支持していた。しかもシモーヌは師を超えた次元の体験をする事により思想と生活を一致させたと云えよう。

1927年シモーヌ・ヴェイユはソルボンヌの哲学の修学単位では学年合格者の中で1番であった。シモーヌ・ド・ボーヴァールも彼女と同級生であった。28年エコール・ノルマルに入学して3年間の学生生活を送っている。この間各種の社会運動に参加している、卒論にはデカルトを選び、1931年アグレガシオン（大学教授資格試験）に合格した。大学を卒業する前年1930年の冬の寒さ以来ひどい頭痛持ちになり、これが彼女の生涯に亘って続いていった。

1931年教授資格を得たシモーヌは学者としての生活を始める事になり、南フランスのル・ピュイと云う町の高校教師となって赴任して行く事になる。当時の彼女の写真からもみられるように可成り度の強い眼鏡をかけており、授業に際しても、前を良く見ずにボソボソと単調な講義をしていた

と云われる。

しかし学生からは愛されていたようで、それはシモーヌが学生達に独自の質問をしては学生達の思考方法を啓蒙したり、彼女の研究成果に負う処多かつたようである。

学校でも彼女は貧しい家庭の学生達に親切でいろいろ指導をしていたと云われる。

彼女の心の優しさは学生ばかりでなく、ル・ピュイの町の失業者や工場勤労者にも向けられ彼等の苦しみや困難を共に分かち合つて行こうとする。シモーヌが借りていたアパートは働く人々のために開放され、彼等の議論の場とされ、食べ物も自由に食べて良いと云う事になり、或る時は彼女の食べ物が何もなかった。

このように社会問題に自分から参加していったシモーヌ・ヴェイユは働く人達とビストロに行つてブドー酒を飲んだり、トランプ遊びをしては彼等の現実の生活をより良く知ろうと努め、助言を惜しまず、時には工場の上司や、役所に改善の依頼を行つたりしている。

1933年から34年にかけてシモーヌはロアンヌ高校の哲学教師をしていた。当時の彼女の哲学講義の中で「歴史における社会の抑圧」と題して、社会的な階級制度の一つである奴隸制を扱っており、エジプトやギリシャに於けるその発生を「最初の抑圧状態」としてとらえている。

シモーヌは抑圧状態を定義して「人間が手段としてしか扱われていない」こと「人間性の尊厳に対する侮辱」であると論じている。

これは工場労働者達に接することにより、抑圧された人々の生活を知つたからであり、社会的な階級制度にあえぐ人達に対する認識が深まり、のちにシモーヌの工場経験につながつて行つたものと云えよう。

ロアンヌ高校で教えていた1934年シモーヌは彼女自身の勉強の爲めとして1カ年の休暇を学校側に願い出ている。この事についてのちにシモーヌはマルセイユで貧しい人達の爲めに働いていたペラン神父に宛てた手紙の

中で次のように書いている。「私は本質的なものを、その人達の間で生活する事によって、生活の違いを知り、彼らのあるがままの姿を愛したいのです」

これは彼女が子供の頃、真冬に氷水で顔を洗ってみたのと同じように現実の生活の中で他人を知り自分自身を知り、深くみつめて本質的なものを探り出そうとする事であり、抽象の世界からの脱出を試みたとも云える。

1年間の休暇を学校より得た彼女はその年パリのアルストムの電機工場に1未熟練女子工具となり、工場で貰う1日4フランか5フランで失業者の1部屋を借り自炊生活をする、この体験は「社会的抑圧」の実態を机上の議論でなくシモーヌ自身が感じてゆく事になる。当時のフランスに於ける工場の状態は設備、環境の不完全さと物資欠乏によりひどい状態であった。

翌年4月彼女は別の町の鋳物工場に職を得ている。一日に決められた部品の数の半分も作る事が出来ず1カ月もしない中に解雇されている。彼女は生れつきの虚弱な体質と手先が不器用であったため大変であったに違いない。

次にルノー工場に入り7月末まで仕事をした。その間も彼女は思索探求する事も怠らず克明な工場日記をつけては働く人達の生活の悲惨な状態とそれを少しでも緩和してあげようと努力している事が分る。1日に8時間か10時間慣れない仕事に肉体は弱まり絶えまない頭痛に悩まされ乍ら、夜は執筆や議論や社会活動をしたシモーヌのきびしい生活態度は働く人、苦しむ人に対する隣人愛からであろう。

シモーヌ・ヴェユが友人のテヴノン夫人に宛てた手紙で「大きな炉の前で顔一面火花を浴びている私をご想像下さい」と書いている。この仕事を通してシモーヌは部品を作る仕事は勤労者を物におとしている事が分った。大きな機械の歯車にしかすぎないと云う事、スピードに対する強迫観念、早く一生懸命に働かなければ充分な収入が得られないと云う事、それは反

面では失業をも意味する事になる。一日中機械の前に自分をおき乍ら、感情や思想を完全に殺していなければならないと云う事は「傷ついた一羽のめんどり」の様な状態であったと云う事が想像出来る。哲学者アランによって思想と探求の態度を鍛えられ、デカルトの厳密な方法を学び知性に基づいてゆく事が誠実で人間的な生き方であると確信していたであろうシモーヌにとって、この工場経験は彼女に別の次元の世界への眼を開かせたと云えよう。

1年間の工場経験で身も心も疲れ果てたシモーヌ・ヴェイユは両親と共にポルトガルの寒村に休養に出かける、彼女はここでキリスト教にふれ、今まで彼女が無関心であった宗教に眼を向けるようになり福音書もひもとき、キリストに近づく為めの努力を一層してゆこうと心に決めている。

再びブルジュの町の高校の哲学教師としての職に戻ってゆき、失業者や労働者の人達の生活に自分をおく事になる。

1937年のスペイン市民戦争の時は義勇兵としてスペインに出かけて行く、シモーヌがそこで眼にしたものは「集団の悪」であった。集団になると人間はかくも悪く変って行くのかと幻滅の悲哀を味わっている。

1941年の独仏戦争の時マルセイユに逃げ、2年間そこにとどまる。避難者や貧しい人達の救済運動を殆んど盲目に近い身であり乍ら心から働いているペラン神父に出会い、キリストについて、宗教についていろいろ議論したり指導をうけたりしている、ペラン神父の紹介でマルセイユの田舎にいた哲学者ティボンを紹介され、農園ではげしい労働に従事したり彼女の唯一の戯曲である「救われたヴェニス」や哲学雑感等をまとめてゆく。

マルセイユでの2年間は外面的な活動は余り行っていないが思索の中に沈潜しており、多くの覚え書きやのちの著作や論文の大半に当たるものを書き上げている。

1942年の5月両親のたつてのすすめに従ってやむなくアメリカへ亡命する事になるが4カ月もしない中にロンドンに行きフランス自由政府の事務

所で働く事になる。

弱い身体に慣れぬ労働等の為め、胸を悪くしていたシモーヌは1943年8月アシュホードのサナトリウムで1人静かに息をひきとった。アメリカ時代からのシモーヌ・ヴェイユの友人であったシモーヌ・デッツに頼んで両親宛の手紙は心配させたくないと言う配慮から以前の住所で出して貰っていたのである。

シモーヌ・ヴェイユの思想革命はアンドレ・マルローやアルベール・カミュ等に影響を与えている、1946年シモーヌ・ヴェイユの作品を読んだカミュは49年ガリマール書店から、「根を持つこと」(L'Enracinement)、「労働の条件」(La Condition ouvrière)、「或る修道者への手紙」(Lettre à un religieux)、「抑圧と自由」(Oppression et Liberti)「神を待ちのぞむ」(Attente de Dieu)や彼女の唯一の劇曲である「救われたヴェニス」(Venise Sauvée)等が発刊されている。

シモーヌ・ヴェイユは人間は時間が経過するに従って善に向うものではないと考え、歴史を絶対視したり、未来を偶像視する事をさせている。現在は建設と同時に破壊であり、未来は想像の産物に過ぎないとみているシモーヌ・ヴェイユは人間が直面している条件に責任を持ち、不条理に対する感受性、不正に対する怒りを持ち続けてゆく事であるとし、彼女自身の生涯はそれを実践して行ったと云えよう。即ち現実の中へ深く沈潜し現実の問題にとり組む事によって人生の重みを荷なって行ったと考えられる。

参 考 文 献

- Hautefeuille "Le taurment de Simone Weil"
Simone Weil "Lettre à un religieux"
"La condition ouvrière"
"Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu"
"Attente de Dieu"